

平成13年度

紀淡海峡地域交流研究会

平成14年 1月22日(火)
リバーサイドホテル(奈良県五條市)



紀淡海峡交流会議

目 次

ご 挨 拶

五條市役所助役 田 村 史 雄 氏..... 1

地域での交流連携事例

五條新町塾代表世話人 山 本 陽 一 氏..... 2

交 流 対 談

紀淡海峡地域の交流資源に関する発言者

徳島大学助手 三 宅 正 弘 氏..... 6

東海南海地域の交流資源に関する発言者

財団法人日本システム開発研究所研究員

武 田 由 美 子 氏..... 6

ご挨拶

五條市助役 たむらちかお 田村史雄氏

ただいまご紹介いただきました五條市助役の田村でございます。2～3日前からの悪天候で、今日は遠くからお集まりいただきます皆様方にご不便をおかけするのではないかと懸念いたしておりましたが、何とか天候も回復してまいったようでございます。ただ、非常に寒い中でございます。本当にこうして大勢の方々に、しかも遠方からご出席いただきましたことをまず心から御礼を申し上げたいと思います。

本来ならば、私どもの榎市長が出席いたしまして、ここで皆様方に歓迎のご挨拶を申し上げるはずでございましたが、公務の都合により私の方から歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。

お聞きいたしますと、今日は、紀淡海峡交流地域、そして私どもが早期実現を目指して活動いたしております東海南海連絡道、私ども五條市が起終点に当たるということと同時に、紀淡海峡交流地域の結節点でもあるということで、この意義ある会合をお持ちいただいたということでございます。

ご承知のとおり、私どもの五條市は、町おこし、そして地域資源の活用というようなことを含めまして、新町通りという、本当に私どもにとりましては地域の宝物と言えるような場所がございます。約1キロメートルにわたりまして、古くは江戸中期あるいはそれ以前から明治初期にかけての古い建造物が数多く並ぶ町筋でございます。中には、国の重要文化財に指定されている民家もあるわけでございます。これを地域の交流資源として大きく皆様方に知っていただくというような目的、そしてまた、この地域の資源を活用してさらに本市を発展させていくと、こういう事業に取り組んでいる最中でございます。

ここでは年に1度、町おこしのための「かげろう座」、つまりフリーマーケットを開催いたしております。わずか3万7,000人足らずの市でございますが、このイベントには例年3万人以上のご参加をいただいております。先ほど申しました東海南海連絡道の、これも起終点でございます三重県の松阪市の方から町づくり団体「あいの会」の方々にもご参加をいただき、ずっと交流を深めている状況でございます。

こうした地域の交流というものをさらに広げるべく、本日こうして紀淡海峡交流地域の皆様方と一緒に、同じルートの線上にある私どもが、今後の交流のあり方とか地域資源の活用のあり方といったことを検討できることは、本当にうれしいことでございますし、大きな期待をしているところでもございます。

今日を機会に、一層交流が深まり、そしてさらなる町の活性化につながりますことを心からご祈念申し上げるわけでございます。今後、こうした会合を重ねるたびに大きな実がたくさんなるような輪を一層広げていただけたら、本当に私どもにとりましてこれ以上の喜びはないと思っていますところでございます。いずれにいたしましても、本日の会合が本当に有意義でありますことをご祈念申し上げ、そしてまた私ども五條市に遠くからお集まりいただきました方々に、心からご歓迎を申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

地域での交流連携事例

五條新町塾代表世話人 やまもとよういち 山本陽一氏



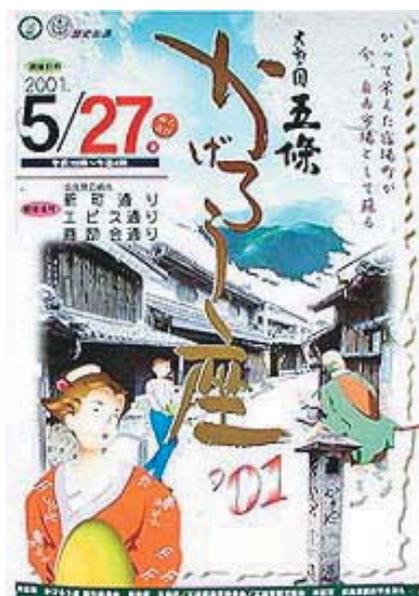
(株)山本本家代表取締役、新町塾世話人代表、大和まちづくりネットワーク代表。

昭和62年頃より青年会議所で学んだ「まちづくり」運動を地元五條で始める。昭和63年「大和まちづくりネットワーク」を創設し、県内まちづくり団体との交流を始める。平成2年五條市新町通で、まちづくりグループ「新町塾」を創設。この「新町塾」を中心にした、自由市場「かげろう座」の開催は9回を数え、毎年大勢の人でにぎわう五條市を代表するイベントとなっている。

ただいまご紹介をいただきました山本でございます。この五條市で、まちづくり運動といひましようか、まちづくりのいろいろなことを実践しております。ちょうどこの会場のすぐ南隣に新町通りという町並みがございます。新町 新しき町と書くのですが、江戸時代の初期にできた町でございます。二見村、五條村という2つの村がございまして、その間に新町村ができました。その当時の「新町」という固有名詞が、現在の「新町通り」という名前として残っております。新しき町という字を書いておりますが古い町並みでございます。

ただいまご紹介をいただいたように青年会議所でいろいろ勉強させていただいた実践をすべく、五條でまちづくり運動をスタートさせていただきました。それが、もう今から15～16年前の話でございます。それから、新町塾というまちづくり団体を創設 私自身が創設したわけではございませんが、現在その代表をさせていただいております。約10名余りの者で、自分たちの町を勉強し、自分たちの町を何とかしようという目的でつくったわけでございます。

先ほどもご紹介をいただきましたように、新町塾では、かげろう座というイベントをやっております。これは年に1回、5月の最終日曜日 今年には5月26日に行う予定でございますが に行っておりますが、おかげさまで10周年を迎えることができました。これも、町にお住まいになっておられる方々を含めて、いろいろなご支援、ご指導をいただいたおかげでございます。五條には、もう1つ大きな吉野川祭りというイベントがございますが、それに次ぐ大きなイベントとなって成長させていただいております。人口は3万7,000人ほどの町でございますが、昨年は3万5,000人余の参加をいただき、イベントと



かげろう座2001ポスター

しては成功したと自負をいたしております。

我々は、この新町通りを紀州街道とか伊勢街道と申しておりますように、古くからの街道でございます。皆さん方は国道24号線をお通りになってこられたと思いますが、今から20年ぐらい前には、まだこの新町通りがメイン通りとして ご覧になっていただくとわかるのですが、細い道をトラックが行き交っていたという町でございます。たまたま都市計画によりまして国道24号線ができ、いわば裏通りになったわけでございます。当時は非常に人通りも多く、もちろん江戸時代を含めて随分栄えましたが、残念ながら、この国道24号線ができてからはひっそりとした裏街道、裏道になりました。



かげろう座2001開催風景

私がまちづくりに取り組む気持ちになった1つの大きなきっかけというのは、青年会議所を通じて全国あちこちを歩かせていただき、重要伝統的建造物群保存地域という、文化庁が指定をしている古い町並みの指定地域がございますが、そういうところをあちこち見させていただいて、「わあ、すごいな」と思っておりましたが、その反面 こんなことを言うと口幅ったいのですが、確かに地域として、システムとして、うまくきれいにできている。しかしそれぞれの1軒1軒の家を見たときに、これが重要伝統的というような家なのかなと。実は、自分のところの町並みと見比べて、これならうちの方がずっとすごいと違うかというふうなことを思ったのがきっかけでございます。

どちらかといいますと、もちろん五條だけではございませんで、この奈良県 和歌山県や三重県も含めてでございますが、このあたりというのは家に金をかけるというか、すごい家がたくさんございます。私は建物の専門家ではございませんで、しっくいや壁を厚く塗ったりして、通常湿式と言われているような土をたくさん使った家がたくさんございます。ところが、近畿以外に行くとそういう家は少なく、壁は大体板壁であったり、通常乾式と言われているようなものです。例えば岐阜の高山へ行きますと、あれはすごくいい通りですが、建物自体は乾式の家でございます。家を比べると、近畿の建物、特に大和の建物がすごいと言われております。橿原の今井町なんかよくご存じだろうと思いますが、すごい建物がございます。

そういう意味で、町並みのよさというものを外へ行って初めて私自身が気がついたといいいますか、勉強をさせていただきました。それで、他の地域でもいろいろなことをやっているのだから五條でもやれるだろうということで始めたわけでございます。おかげさまで、かげろう座も今年で10周年を迎えました。新町通りを含めたこの地域を五條の顔にしたいというふうなことを目指して頑張っているとこ



新町通りの町並み

るでございます。

さて、今日は東海南海交流地域における1つの事例発表ということでございますので、お話をさせていただくわけですが、五條には「五條十八景」というものがございます。この「五條十八景」といいますのは、江戸時代、寛政の改革によって1795年に五條に代官所ができ、当時初代代官であった河尻甚五郎という方が「五條十八景」というものをつくりました。これは漢詩と日本画による詩画調のもので、代官所ができたときの記念事業だったのかと想像されております。何冊か現存しておりまして、1部は東京の博物館でしたか図書館にございませぬし、また、五條の一般の民家の方がお持ちになっておられるものもございませぬ。

なぜこういうことを申し上げるかということ、和歌山県の有名な三文人の1人であった祇園南海という方がこの五條近辺にお越しになったようで、こちら辺が非常に景色がいいということで、この祇園南海という方がこの漢詩を詠まれたようです。それを文人画家と言われている三重県の三井丹丘という方が絵をかかれた。この河尻甚五郎という初代代官が非常に力を持っている有能な方だったのでしょう。そして、随分人脈もお持ちだったのでしょう。松平定信という老中がおいでになりましたが、その方が書を書いておられます。そういうものが現存しております。

交流がないとこういうことができないわけで、三重県なり和歌山県 昔の紀州、大和、そして伊勢といった3つが合体をしてできたものでございませぬ。詳しくは、また五條市のホームページをごらんになっていただければと思ひます。

道路というのは、今は松阪から和歌山まで車だと5時間ぐらいで行けませぬか。当時はそんなに早く行けるわけはありませぬし、当然足で交流をしているわけでございますから、そんな中でこういうすばらしいものが合作でできていたということでございませぬ。交流を図らないことには、こういうものは当然できませぬ。我々が推進している東海南海連絡道でもそうですが、松阪市の「あいの会松阪」さんと交流をさせていただいております。ちょうど今から4年ほど前でしたか、「あいの会松阪」の田畑（美穂）先生がお越しになって、一度交流をしないかというようなことでお話がございませぬ。いろいろとお聞きしましたら、随分ご熱心な先生で、喜んでおつき合ひをさせていただこうということで交流がスタートいたしました。

かげろう座には3年前に、「あいの会松阪」さんの方からご出展をいただきまして、藍染めを売っていただいたり、翌年には紙人形で参加をいただいたりして交流をしております。松阪にも同じ新町通りという町がございませぬ。これは、私も五條に比べると随分にぎやかな商店街ですが、実はそこでもフリーマーケットをおやりでございませぬして、我々が持っている情報を「あいの会松阪」さんの方にご協力をするようなことしております。



奈良県三重県合同のギャラリー



さらに、ちょうど2年前の2000年から、これも「あいの会松阪」さんからのご提案によりまして、三重県は櫛田川、奈良県は吉野川、そして和歌山県は紀の川というこの3つの川を通じた地域交流ができないだろうかという話があり、できたらおもしろいですなということからスタートいたしました。

第1回の交流会は三重県の飯高町で開催をし、2回目は、その同じ年に今度は奈良県の川上村で、私ども新町塾の主催で開催させていただき、市町村以外の団体が20団体ほど参加をいただきました。吉野町には和紙の紙すきがございまして、三重県にもそういう団体がございしますが、そういう団体同士の交流がさらに進んでいったりしております。昨年、第3回目が11月に松阪市で行われました。本年度は奈良県で行う予定としております。場所はまだ決まっておりませんが、そういう交流会をやっております。また、松阪には祇園祭りというのがございます。京都と同じように夏に行いますが、それに参加をさせていただいたりして、個人的なつき合いも含めていろいろな交流を進めております。

今後もお互いに負担にならないようなおつき合いを続けていこうと考えております。東海南海地域での交流の事例につきましては、このくらいで終わらせていただきますが、私の発言を1つの参考事例としてお聞きをいただければ幸いです。ご静聴ありがとうございます。

交 流 対 談

紀淡海峽地域の交流資源に関する発言者

徳島大学助手 み やけまさひろ 三宅正弘氏

プロフィール

工学博士、地域計画家、三宅正弘環境デザイン研究所を経て、現在徳島大学助手、関西学院大学非常勤講師、武庫川女子大学非常勤講師。

ケーキやお好み焼きなどの食の視点からまちづくりに取り組み、地元（阪神間・六甲山麓）のピンク色の地場石材（六甲花崗岩・本御影石）を使ったまちづくりを実践している。平成11年度及び平成12年度に紀淡海峽交流研究会で交流資源の発掘や交流の在り方についての提言をまとめる。主な著書に、「石の街並みと地域デザイン」、「阪神間モダニズム」、「近代日本の郊外住宅地」などがある。

東海南海地域の交流資源に関する発言者

財団法人日本システム開発研究所研究員 たけだ ゆ み こ 武田由美子氏

プロフィール

財団法人日本システム開発研究所研究員。

同研究所大阪事務所で、空港、高速道路や連絡橋等交通プロジェクトに伴う各種インパクト調査や地域の対応策等、広く交通問題についての研究に携わる。また、東海南海連絡道や太平洋新国土軸構想に関連して、地域間の歴史・宗教のつながりや、小説の舞台、食文化など様々な視点から、地域の魅力をアピールすることのできる交流資源の調査研究に取り組まれている。

〔武田氏〕

これから約30分間になりますが、三宅先生と私とで紀淡海峽交流地域と東海南海交流地域の歴史や文化のつながり等についてお話しをさせていただきたいと思います。

三宅先生は、食べ物や地質のことについて非常にお詳しいということなんですけれども、紀淡海峽の地域も含めて、そういったことから何かご紹介いただけますでしょうか。



交流対談

〔三宅氏〕

このたびは、本当にいい機会をいただきましてありがとうございます。

今、ご紹介をいただきましたが、私自身は「食」と「石」について特に詳しく見ております。

今日、2つの話を考えてきました。1つは、皆さんよくご存じの赤福もちの話をしていただきます。これは誰もが知っている有名なお菓子なのですが、意外と知られていないこともあります。もう1つ、この地域で使われている青石です。赤福もちと青石の話をしていただきまして、最後にこの2つをつなげてみたいと思います。

私自身、食についてずっと研究しております。もともと、ケーキの町で生まれ育ちケーキ職人を目指しておりました、ケーキ屋さんで働いたりもしておりました。この10年間は、1日1個必ずケーキを食べております。食べたケーキを全部絵の具でスケッチしておりますが、これがノート10冊ぐらいたまってきました。1年間、1つの種類に絞ります。例えば98年はミルフィーユばかり食べます。ほかのものが入ると、なかなか比較できません。1年間集中的にやって、自分なりのランキングをつけます。

最近、ケーキを食べるということを私はダイエットの手段にしています。どういうことかという、甘いものとかケーキを食べると罪悪感が非常に出てきます。そうすると、歩こうと思うんですね。私なんか毎日食べているので、それなりに気になります。神戸市内で食べると、気になって歩いてしまい、いつの間にか大阪まで着いているということがよくあります。これは職業病と言えるかもしれませんが、家から大阪や神戸まで歩くのは、年間で10回を超えます。今日も、食べて食べて徳島まで歩いて帰りたいのですが、そういう生活をしております。

甘いものがあると、何か歩きたくなくなります。私は、今日この五條に朝7時に参りました。この町もいい町で、駅をおりたらすぐに和菓子屋さんがあって、ここに来るまで4軒ありました。途中、1軒目、2軒目で、五條は若あゆのお菓子が名産だということに気づいて、3軒目の店に入って買って食べてみました。これで、最初の罪悪感が始まるわけです。これは歩かないといけないと思って、もう少し行くと、この新町に差しかかる1つ目の橋のところに揚げまんじゅうのお店がありました。これはおいしそうだと、おいに引かれて買いました。食べているうちに、ここにいつの間にか着いてしまいました。五條からここまで、何の苦にもなりません。町並みもあって、食べるものもある。食べ物があるということは、町を歩くということに非常につながっていきます。私は、もともと神戸にいたのですが、この4月に徳島に行きました。お遍路のことを調べておりますと不思議に思えてくるのは、どうしてあの八十八カ所を歩けたのかということです。

私の経験からすると、多分何か甘いものがあったのではないのかということです。なぜあれだけ歩けるかといったとき、必ずお菓子があったはずだと思うのです。お菓子があったから歩けたのと違うかなと。それは、僕が大阪から神戸まで歩いている経験からすると、何かそういう気がしてきたわけです。

紀淡海峡地域、東海南海地域に共通して言えることは、ここの地域というのは、歩くというライフスタイルが日本の中でも定着している。後ほど武田先生からお話があると思いますが、熊野詣からお伊勢参り、少し歩くことから遠ざかりますが、友ヶ島を周辺として大阪府、和歌山で修験道があります。もちろん、四国に入るとお遍路があります。本当に、これだけ歩くと

ということがあって非常に健康的なわけです。

これからは歩くということが大事な時代になります。私は、大阪から神戸まで歩いていると言うと、笑われます。ところが、この地域では歩いていても全く変に思われません。歩くということが100年、200年と、脈々と続いてきた地域です。甘いものがある、しかも歩ける道があるというのは 道路をつくらうというときに歩く話も何かないと思いますが、伊勢から南海道を通り、紀淡を通して、おそらく松山までかなり名産もあって楽に歩けると思います。

私は石の研究をしておりますが、先月、石の本を学芸出版社から出版し、その中身の話もありますが、私自身、石に引かれたというのは、神戸の六甲山麓に生まれて私の原風景はピンク色なんです。私は、よそに行くとき必ずポケットの中にピンクの石を入れていて、「僕の街はピンク色です」と言っております。ピンク色の石を見たらわかってもらえるわけです。地域によって色が違うというのは当たり前の話なんです、意外と認識されていません。

スライドに映っているのが六甲山麓のピンクの石垣です。

こういう町並みが続いております。

有名な伊勢の二見の夫婦岩です。これは、色を見ていただければわかるように緑色をしております。伊勢では、伊勢青石と言われております。この石と同じ色のものが紀州にもあって、紀州青石と言われております。また、阿波にもあって阿波青石、伊予に行くと伊予青石となります。これらは、地層で1本につながっています。

これは和歌山の雑賀崎ですが、同じ色をしております。

これが紀三井寺です。今日、お集まりになられている方はほとんどこの石の上に住んでおられるので当たり前だと思っているかもしれませんが、これは日本でもこのエリアだけです。

これは、徳島の千秋閣という庭園です。皆さん、この石の積み方をよく見られていると思います。このエリアだけしかない積み方です。石の質が同じだと、石の積み方も同じになってきます。徳島に行くと、二宮金次郎まで青石で作られています。

これが佐田岬の先端の風よけの石です。これも同じ色をしています。

風よけの畑の石です。

伊勢から伊予の先端、そして九州まで同じ質の石が続いています。これは、まさに太平洋新国土軸に当たります。



六甲山麓石垣



これからは赤福もちのお話をします。実は、この石と大いに関係があるんですね。この赤福のおもちというのは、実はこの石なんです。赤福もちというのは、おもちの上にあんこが乗っています。このおもちの部分というのは、お伊勢さんのところを流れる五十鈴川の川床の石をモチーフにしているようです。上にあんがかかって線が入っていますが、あれは川の流れらしいですね。これはこじつけかもしれませんが、あそこの石は青石です。だから、これは見方によったら、青石のものなんですね。

私、最近この地域でいろいろな商品開発をしておりますが、各地で石の産物をつくろうと思っております。これを食べ歩いている間に伊勢から九州まで着くコースを考えてみたいと、今思っているところです。

ちょっと長くなりましたが、一旦ここで終わらせていただきます。

あと、私自身、この地域の共通性を調べているのですが、歩けるコースに美味しいお菓子がたくさんあるということと、石のつながりというのをさしあたり強調したいと思います。

〔武田氏〕

ありがとうございました。非常に興味深く聞かせていただきました。赤福もちが青石がテーマになっていたという発想は、ああ、なるほどな、言われてみればそうだなという感じがしました。

実は、伊勢市が近畿日本ツーリストと一緒にあって東京で伊勢文化フォーラムを開催しています。東京の方々を対象に伊勢の文化や紀伊半島の地域の文化をご紹介します。その中で、パネリストとして登場されていた嵐山光三郎さんは、伊勢の赤福は、やっぱりあそこで食べるべきだとおっしゃったんです。今は百貨店でも売っているのですけれども、何が違うかというと、あのかき氷が違う。夏場の伊勢のかき氷、あれは絶対現地で食べるべきだとおっしゃっていました。やっぱり、その地域地域で、そこでしか食べられないもの、そこでしか味わえないものというのがあったらなと、今お話を聞いていて思いました。

【三宅氏】

私自身、こういう地域の仕事をしていると、余りメジャーなものにはスポットを当てたくはないんですが、「石」ということを余りご存じないかなと思ひまして。

ただ、これよりももっと小さなものをたくさん開発していくということが、僕自身は目指すべき方向かなと思っております。

【武田氏】

もう1つ、今三宅先生の方から、「歩く」というのが非常に重要なんだというお話がありました。

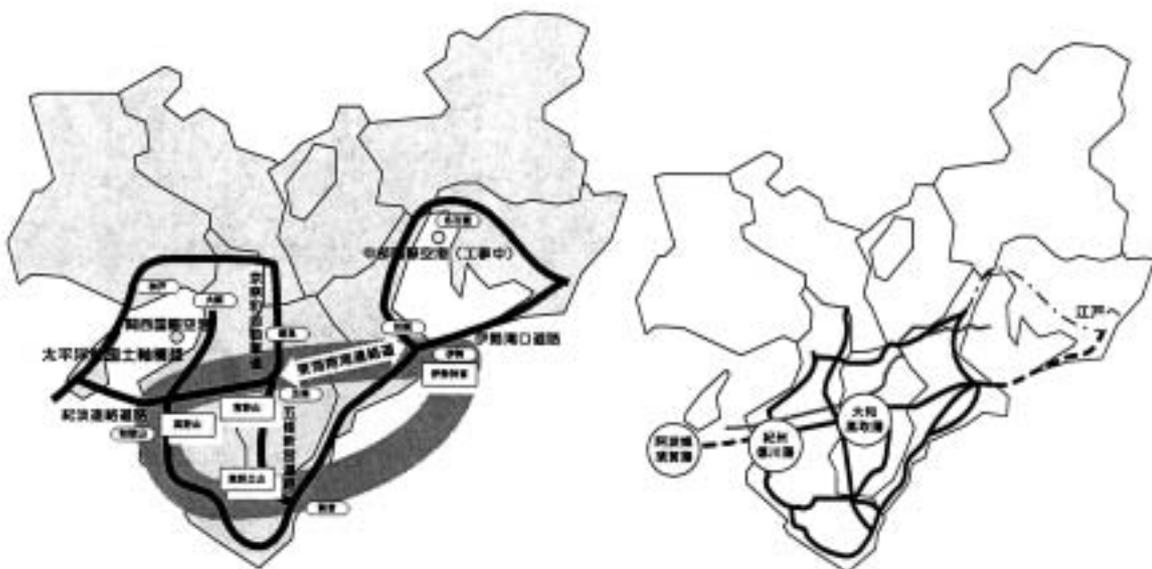
引き続き、若干、東海南海交流地域のことをお話しさせていただこうと思います。

先ほどから五條市の助役さん、山本先生からいろいろ詳しいお話が出ました。私なんかがお話しできることはもうほとんどないかなという気もしているのですが、この地域の道がどういふふう形成されてきたのかということをお話で勉強しています。今日は幾つか資料を持ってきましたので、ご覧いただきたいと思ひます。

資料の1、「祈りの道」と書いてあるところに、阿波蜂須賀藩から始まって紀州徳川藩、大和高取藩と、ずっとマルでついているものがあります。実は、この地域、この道は「紀州街道・伊勢街道・和歌山街道・大和街道」といろいろな呼び方をされている道なのですが、参勤交代で使われてきました。私たちは徳島の方にも非常に感謝しなければいけないと思うので

資料1 東海南海連絡道は「祈りの道」

- ・東海南海連絡道は伊勢神宮、吉野山、高野山など「祈りの地」を結ぶ「聖なる回廊」
- ・阿波蜂須賀藩、紀州徳川藩、大和高取藩は参勤交代の道としても活用

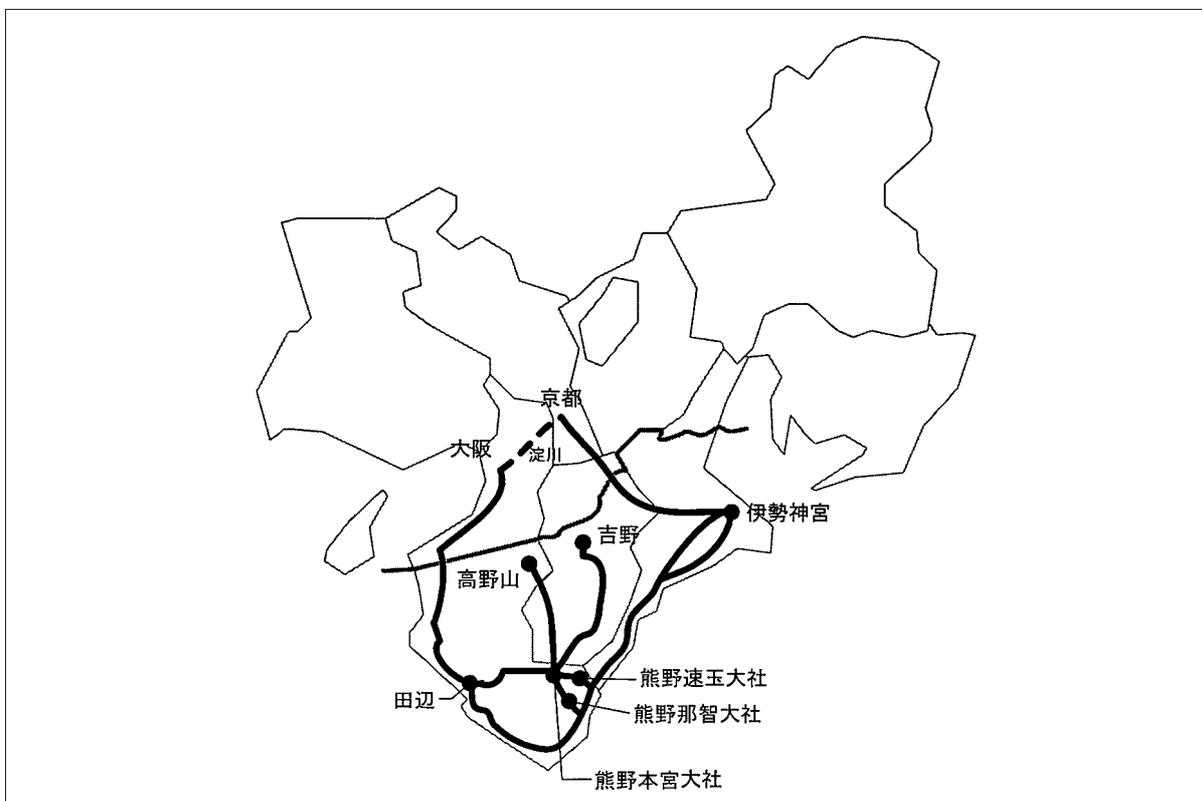


作成:(財)日本システム開発研究所

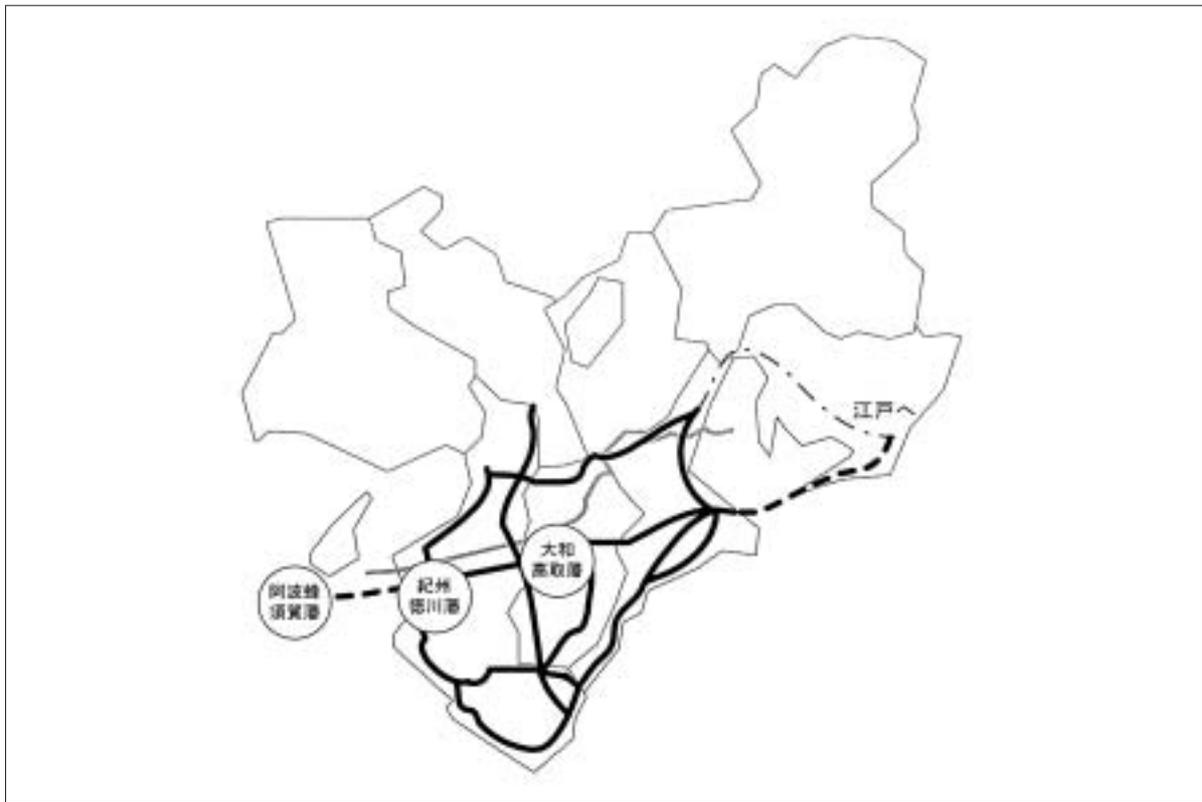
【縄文から現在までの道の変換】



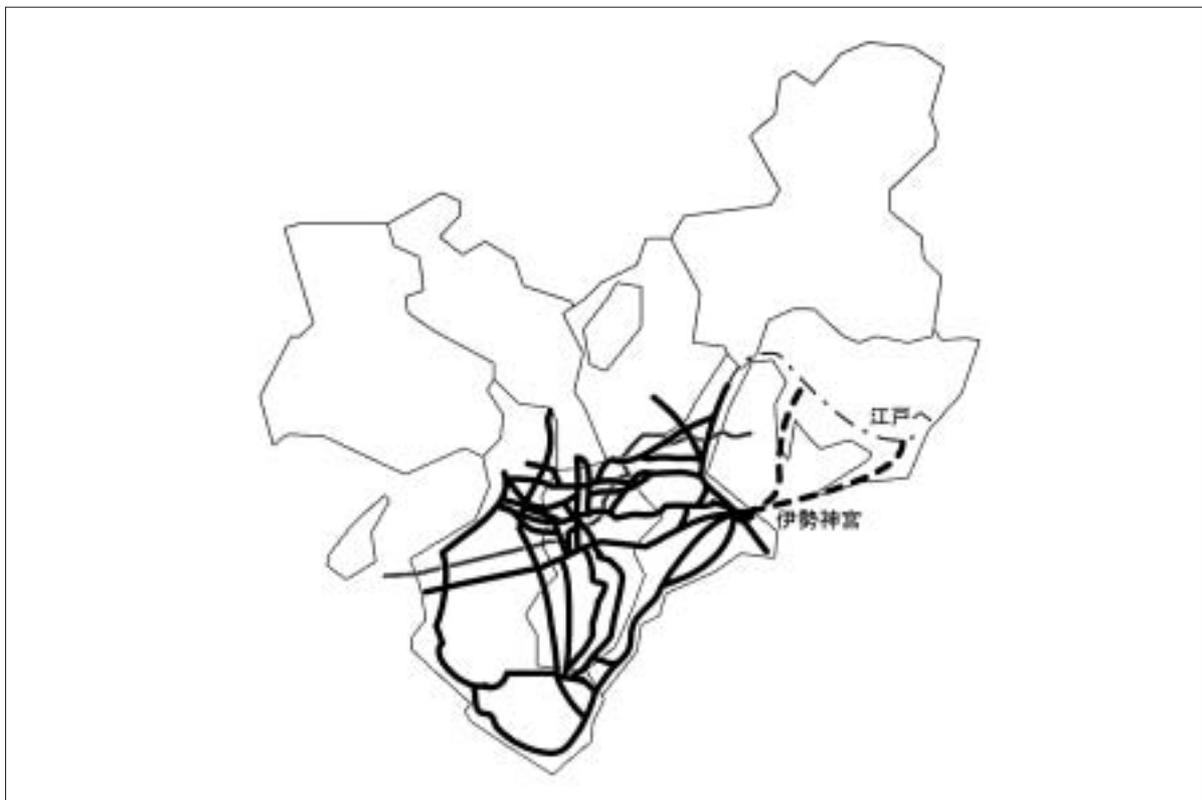
縄文時代 サヌカイトの出土分布、道の創世期



平安時代 熊野御幸による街道の形成期



江戸時代 参勤交代による街道の発展期



江戸末期 おかげ参りによる街道の繁栄期



現 在

すが、参勤交代はもちろん歩く旅です。そのおかげで、この街道沿いが非常に栄えました。

その前の時代はどうだったかというと、古くは縄文時代からサヌカイトという同じような様式の遺跡が、この紀の川・吉野川流域と櫛田川流域で発見されています。どうやら、この川に沿って行き来があったんじゃないかと言われております。

平安時代に入りますと、熊野詣といって京都から熊野三山へ非常に多くの方が向かうブームが起きました。そのときに、縦の道が発達したと考えられております。

その次に、阿波蜂須賀藩等の参勤交代で発達してくるわけですがけれども、その後、江戸時代の後期になりますと道の縦横が非常にネットワーク状になってきます。

山本先生からも、道の交わる点として五條というのは発展してきたんだよというお話があり



文学作品と現在の道

ました。まさにそうで、この地域はいろいろな縦横の道が交わる地域です。縦横のネットワークで非常に栄えてきた地域です。

先ほど三宅先生が「歩く」というお話をされたので、参勤交代で歩いたことによって出来た街道沿いの主な宿場を挙げてみました。ほとんどのところは縦横の道が交わる場所ですけれども、そのようなところにたくさんの宿場ができて栄えてきたということがあります。

この地域は、三重県には伊勢神宮、奈良には吉野山、和歌山には高野山、粉河寺、紀三井寺と、さまざまな祈りの拠点があります。それらを目指す巡礼の人たちも歩いてこの地域を回ったわけですが、そのときどきに自然の美しさ、文化のすばらしさというものを感じていただいたんじゃないかなと思うのが次です。

この地域をテーマとしたそれぞれの文学作品を挙げてみました。すると、やはり街道沿いにたくさんの文学作品が生まれていることがよくわかります。

ここからは推測でしかありませんが、皆さん、いろいろな道をたどって、そこで地域の魅力、資源を感じて文学にあらわすといった方法をとられたのではないかと考えております。この地

域が非常に古いなと思わせるのには、「古事記」、「日本書紀」、「万葉集」といったものでこの地域がPRされているところでもあります。

本日は、資料の2、「おかげ参りは団体観光ブームのはじまり」と書いているところがありますが、この道は東海南海連絡道が計画されているルートで、伊勢参りの道としても使われました。伊勢参りは、江戸時代には約60年に一遍ブームが起こったと言われております。

資料2 「おかげ参り」は団体観光ブームのはじまり

- ・江戸時代には、60年周期で伊勢参詣ブームが発生
- ・宝永2年(1705年)、明和8年(1771年)、文政3年(1820年)には、400万人が伊勢を目指した?!

文政3年(1820年) おかげまいり推定波及範囲



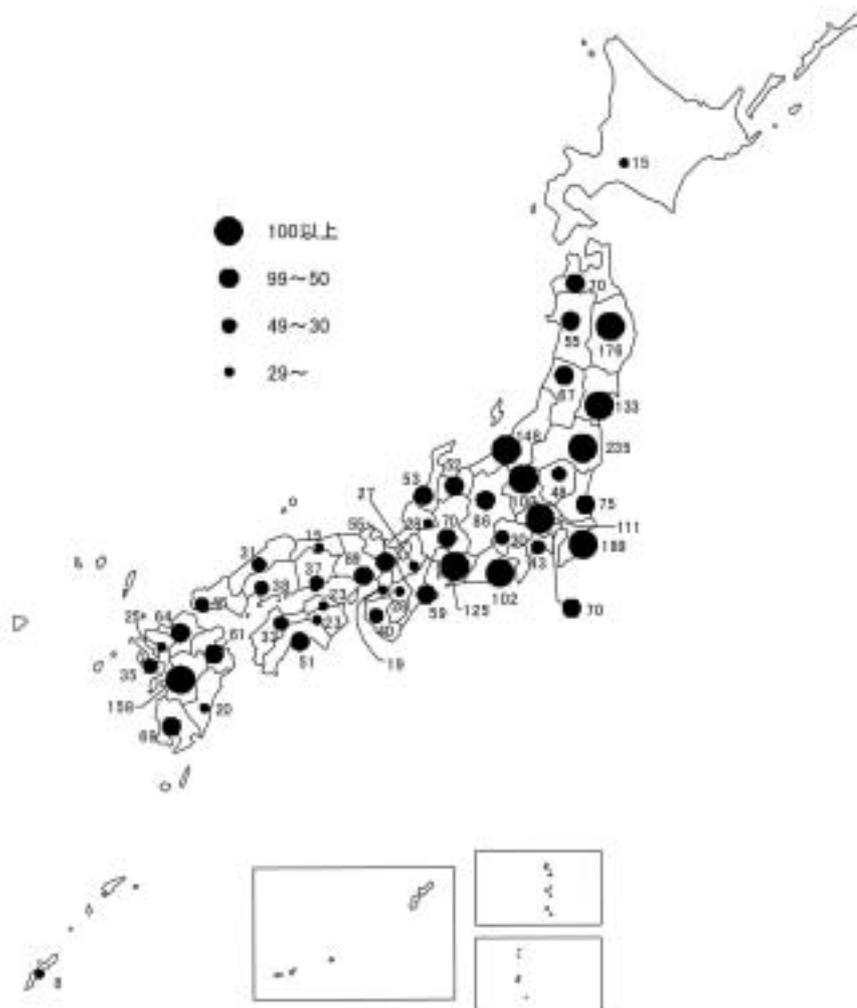
参考資料:「伊勢街道」建設省中部地方整備局三重工事事務所

こちらの地図は、そのブームを反映して、大体どのあたりから皆さん来ていらっしやったかということを書いたものです。どうしてこんな遠くから人が来たのだろうかというのが、資料3で「交流のしかけ人」です。実は放っておいても、この地域が栄えたわけではなくて、また、こんなにたくさんの文学をみんなが書いてくれたわけでもなくて、実は仕掛けがあったということです。その仕掛けが、例えば「御師(おんし)・先達(せんだつ)・熊野比丘尼・大峰修

資料3 交流のしかけ人...^{おんし}御師、^{くまのびくに}熊野比丘尼、^{こうやひじり}高野聖、大峯修験者、伊勢商人が大活躍

- ・「おかげ参り」大流行の影には、「交流コーディネーター」の存在あり
- ・地域の物産を持って東北から九州まで地域PRにつとめた「しかけ人」たち

全国の「熊野神社」



資料：全国熊野神社データベースより作成

験者・高野聖」といった人たちです。彼らは、時代はばらばらですが、全国を歩いて回って、この地域にぜひ一生に一度は来なさいよという地域のPRをしてくれたんですね。それがまさにこの地域により多くの人たちが訪れるきっかけになったんじゃないかと考えられています。

四国の方では、「お接待」という文化があります。四国八十八カ所をめぐるときにお接待文化でもてなす。それと同じことが、やはり紀伊半島にも残っています。「施行(せぎょう)」と言いますけれども、伊勢参り、大和めぐりをされた方たちに、食べ物や宿 善根宿を提供するということがよく行われておりました。これは、やはり弘法大師を通じて四国とつながっている祈りの地ならではのなと思います。

例えば、奈良の吉野山には3万本の桜があります。多くの方が春に訪れますが、この陰にはやはり地元の方の努力があります。冬場になるとむしろをまいたり、春になると下草刈りをしたり、除草をしたり害虫駆除をしたりと、地元の方々がグループをつくって一生懸命やっています。来てくれる人たちになるべくきれいな吉野を見て帰ってもらおうという気持ちも接待の1つじゃないかなと思います。

紀伊半島の方はこのような事例がありますが、紀淡海峡地域の方では先ほど「めぐり」という話が出ました。そちらの方について幾つかご紹介いただけますでしょうか。

〔三宅氏〕

紀淡海峡周辺で見ますと、弘法大師が歩かれた八十八カ所、それと淡路と本州をつなぐものとして一つ着目したいのは修験道です。これは役行者で、こういうように歩くことによって修行を体験していくようなものがあります。ちょうど、この国土軸に沿ってこういうのが3つ並んでおります。こういう事例があります。

淡路では七福神めぐりなどがあります。これは紀州でも伊勢でも、各地であると思いますが、こういったものですね。

〔武田氏〕

ありがとうございます。お話をお伺いして、「歩く」ということ、そして「めぐる」ということが共通しているなという感じを受けました。

それでは、次にそういう地域のつながり、海を越え、山を越えてつながっている地域、このつながりをどうやって生かしていくのだろうかということに入っていきたいと思います。

まず東海南海交流地域の方から先にご紹介させていただきます。こちらの方では、住民の方々が主体になった動きのほかに、行政でも研究会を立ち上げ、東海南海連絡道に関するホー

資料4 行政の取り組み

東海南海連絡道ホームページ

近畿と中部を結ぶ21世紀のフロンティアロード!

東海南海連絡道

Tokai Nankai Access Road

魅力いっぱいの東海南海連絡道が繋がれば、こんなコト、あんなコトもいろいろ体験でき、ますます出会いと交流の輪が広がります。知れば知るほど楽しくなる21世紀のフロンティアロードを、愉快的なキャラクターたちが道案内。さて、あなたはどこからのぞいてみる?

01237

202×年
東海&近畿エリア

<http://www2.mie-net.ne.jp/tnroad/home/home.html>

ムページをつくっております。3県のキャラクターとしてそれぞれ鯨（和歌山県）と鹿（奈良県）と牛（三重県）の3頭がかわいいので、ぜひとも一度ご覧いただきたいと思います。平成11年には南紀熊野体験博を和歌山県さんが中心になってされましたけれども、その中で奈良県さん、三重県さんも協力する形で3県イベントを行っていらっしゃいます。

先ほどから何回もお話に出ている三重県の松阪市の田畑先生のご紹介をさせていただきます。本当にアイデアマンといえますか、茶目つけのある方といえますか、素晴らしい方です。この田畑先生はここに「全国伊勢屋・松阪屋来福帳」というものがあります。全国に「伊勢屋」もしくは「松阪屋」という名前のついたお店が今でも1,700軒ほどあるそうです。そちらの方々は、今はもう疎遠になっているかもしれないけれども、名前がついているんだから来てくださいよと言って、片っ端から電話帳で調べて手紙を送って、松阪でサミットをされたそうです。



来福帳

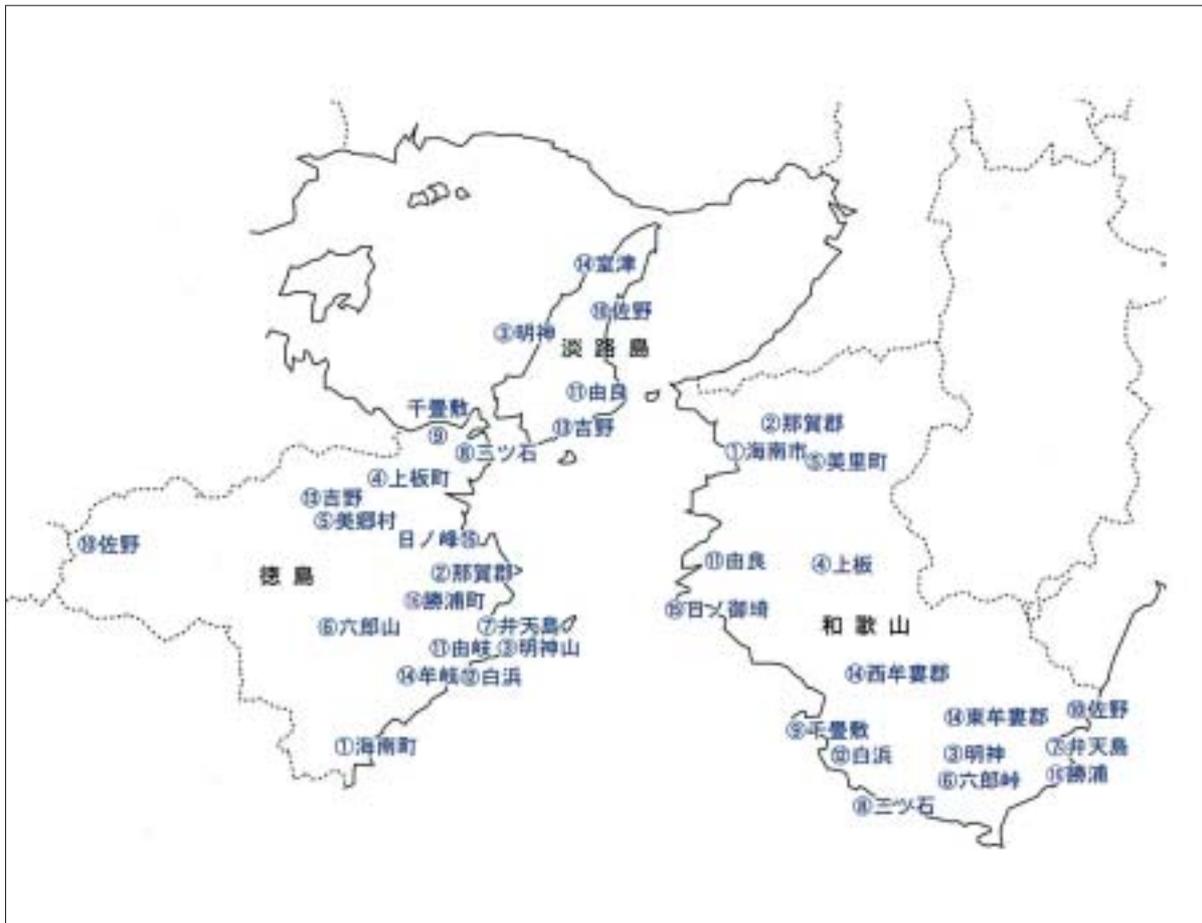
そういうおもしろいことをしていらっしゃるのですが、その先生がいつも「道・町・市（みち・まち・いち）」という話をされているんです。「市」というのは市場です。市というのは、交流にとって非常に大事なんだということをいつも話されています。五條にも市があったということで、かげろう座というのはまさに現代に市を復活させたものだとは私思っております。こういった交流というのは非常に大事ななという感じがします。

紀淡の方で何かおもしろい取り組みというのがあったらぜひ先生にご紹介いただきたいのですが。

〔三宅氏〕

取り組みとして一つ印象的だったのは、先日、和歌山県さんと徳島県さんが共同で、和歌山の小学生が太鼓を演奏し、徳島の小学生が浄瑠璃を演じる交流イベントをされました。集まっておられた方は、和歌山と徳島がこんなにも近かったんだ、こんなに共通性があるんだという思いをお持ちになられたのではないかと思います。今日、五條の街道を歩いて思ったのですが、心中事件の看板がありました。歌舞伎のシナリオにもなっておりますが、この地域というのは演劇を通してのつながり、交流するイベント、共通している素材がたくさんあります。資源の宝庫であるということです。交流をしていくのに共通して話せる題材がたくさんあるということです。

そして、紀淡海峡交流会議の研究会に参加させていただいて非常に勉強になったことの1つに地名があります。紀淡海峡を挟んでこの地域には非常に共通性があって、そのことで同じ地名がたくさんあつたりします。先日も、小学校で講演をさせていただいたのですが、小学生の間でもお互い関心を持てる題材なんです。だから、こういう題材をテーマとして市民レベルで、生活のレベルで共通性を議論していくような、イベントとは一味違った日常的な形で関心がわくようなものも一方で詰めていくということ、こういう足がかりを研究会をやっていくうちに勉強させてもらったというところです。



共通する地名

〔武田氏〕

そうですね。先生のお話をお伺いして、勉強会もいいんだけど、住民レベルでも一生懸命やっつけていこう。そのベースとなるのは、例えば名前について、何で一緒なんだろう、不思議だな、「吉野川」が徳島県にもあるし奈良県にもある、何でだろうというようなことから始めるというのは非常に大事だということ、なるほどなと思って聞かせていただきました。

つながりを大事にして住民の力を集めようということで、事例を2つほどご紹介したいと思います。

1つは、四国です。「骨太四国をつくらうよ」ということで、昨年高知で開催されました。真ん中の魚の骨といい、ネーミングといい、非常にすぐれているなと私は思ったのですが、これは今の道のあり方はこれでいいのだろうかということを住民レベルで考えましようという趣旨で、高知で開催されました。坂本龍馬にちなんでシャモ鍋をみんなでつつきながら談義を交わしたということです。これがそのパンフレットなのですが、非常にすごいなと思ったのは、裏面が血判状になっているのです。

高知だけではなくて四国の道を何とかしていこう、四国の町を何とかしていこうということで私たちは頑張っていますという血判状をつくって、東京に持って行く。こういうものは、東京にとったらやっぱりインパクトがあるだろうなという気がします。茶目つけもあるしインパ

クトもあると思います。

もう1つは、九州の事例です。資料の5です。九州7県と沖縄県、山口県で9県になりますが、毎年回り持ちでアジアとの交流を進めようと大きなタイトルを持ってきています。先ほど先生が言われました「つながり」というものももちろんで、九州は実は1つだという意見もあ

資料5 九州の広域交流・連携の事例

・九州8県+山口県で、アジアとの交流を目的とした人材育成プログラム
「九州アジア大学」を開催

九州アジア大学開催概要

	開催年	開催場所	主な視察先
第1回	1997年	福岡県	環境施設、企業 等
第2回	1998年	宮崎県	高岡町、県JA食品開発研究所、県工業試験場 等
第3回	1999年	佐賀県	有田町、唐津商業高校 等
第4回	2000年	長崎県	県窯業試験場、陶芸の館、県農林試験場 諫早干拓の里、孔子廟、復元出島 ハウステンボス環境施設
第5回	2001年	大分県	ビックアイ、大分香りの森博物館 大分農業文化公園 ほか



<http://www.oec-net.or.jp/kyu-asia/index.html>

参考資料：「九州アジア大学報告書」九州アジア大学実行委員会

るのですが、「九州は1つ1つ」とも言われます。それぞれが別の方向を向いているというようなことがあります。しかし、これではいけない、アジアと一体になって交流するためには九州が1つにならないといけないということで、海を越えて沖縄、山口とも連携をとり、九州各地にアジアから来ている留学生と各県の若い人たちの交流会です。

各県から10人ずつ集めて90人、若干余裕を見て毎年100人ぐらいなんですけれども、その人たちを4泊でしたか、一緒に寝泊まりをし、一緒に話して、そして九州のファンをどんどんつくっていくということをされております。こういう試みも非常におもしろいと思います。これは、どちらかというと行政が主体になってやっているものですが、このような取り組みも交流を深めていく1つではないかと感じました。

先ほどの先生の「つながり」ということ、「住民のつながり」というようなお話から、実は「生活のつながり」ということを私は思いました。ヒアリング調査にお伺いしたことがあります。奈良県の吉野町のあたりで吉野杉をつくっていらっしゃる方にお話を伺いました。す

ると、一時人手が足りなくなると山の手入れができなくなったというお話がありました。それでどうしたかという、徳島の木頭村のあたりに木頭杉という有名な杉がありますが、そちらの方から人手を借りてきて技術を一緒に共有して山の手入れを手伝ってもらったという話をされておりました。それを聞いて、ああ、なるほどな、そういうふうなつながりができるんだなと思ったのです。

もう1つ感動したのが高野山です。高野山は「ごま豆腐」が有名で、私も大好きなのですが、ある高野豆腐のお店で、黒砂糖みたいなものをかけて出されたことがあります。それは、お豆腐というよりもデザート感覚なんですね。ああ、これおもしろいですねと言ったら、おかみさんが、いや、これはね、徳島と香川の和三盆なんですよとおっしゃいました。ああ、そうですかと言うと、四国お遍路で回っていらっしゃる方々が満願に高野山にいらっしゃる。せっかく四国を回ってきた方々だから、私たちも心のどこかで四国とつながっていたいんですよ、だからお醤油じゃなくて和三盆でお迎えして、私たちも四国の方に感謝しているんですよということをおっしゃったんです。ああ、これはいいなと思って、まさに食のつながりだなと思いました。

そういうふうな事例というのを、先生、よくご存じじゃないですか。

〔三宅氏〕

そうですね。地元のものを使っているというところはたくさんありますが、そういう交流のものというのはこれから開発していくべきもので非常に参考になると思います。

今ふと思い浮かぶのは これは紀淡海峡と少し離れますが、神戸の灘地域では、海側で酒造が発達し、山の手で私が研究をしているケーキなどが同時に発達いたしました。最近、小さな工房と大きな酒造会社と一緒に取り組む形態が出てきています。おもしろいなと思ったのは、お酒のおちょこの中にケーキが入っているお酒スフレというものが共同開発されています。ケーキを食べてしまうと、おちょこで酒が飲めるようになっているんです。あと、灘のお酒をもとにしたお酒のボンボンで、「灘のぼんぼん」というお菓子があります。

いろいろな地域で民話などがどうやって覚えられてきたのかなと考えるとき、お菓子に入っているしおりのようなものに、その地域の伝説が入っていたりすることがあります。教科書を見るより、お菓子を食べてついでに学べる方が覚えやすいので、先ほどおっしゃったような事例なんかでも、読むと非常に心が温まるというか、何かそういうのはお菓子にたくさん隠されているかもしれませんね。

ただ、お話のように、この地域にはもっとそういう隠されている資源というのがある。だから、引きつけられるんでしょうね。無理やりつくっていつているところというのは、何かとってつけたような感じがしますが、この地域を歩いていると、必ず1日1個、何かおもしろいものが見つかるということで、これは新しくできた町と違って、この道は何千人、何万人、何百年というレベルで歩かれた道ですから、やはりそういう物語というのが蓄積されているんでしょうね。それゆえにおもしろいですね。

だから、つくっていくというよりも、本当にこの研究会に参加させていただいて実感しますのは、毎回行くたびに地域がおもしろくなってきて、いつの間にか今までの行政区画ではなしに、昔の道沿いでコミュニティーができていたり、私自身も本来、海というものは地域を隔て

るものだと思っていたのですが、海自体が1つの町で、向こうに和歌山があって、向こうに徳島があって、向こうに...という、こういう研究をすることによって自分の頭の中の地図というものがらっと変わってしまいました。それが非常におもしろいと思います。

だから、世界から来られる方も、「日本」といったときに、すぐこの帯状の道が頭に描けるようになっていくためには、情報をくまなく発信していくことが大事なんでしょうけれども、私自身は、いつの間にか紀淡海峡という1つの街があるように頭ができてきております。あそこを歩きたいな、あそこを進みたいと思うような情報を発信していけたらいいですね。

【武田氏】

今、世界から人が来たときにイメージが浮かぶようにというお話がありました。今、四国の遍路道を世界遺産にという動きがあり、また一方では高野・熊野地域を世界遺産にしていこうという動きがあります。四国、紀伊半島が一体になってこれがもし世界遺産になったとしたら、これはすごいと思うのです。世界から人が来る。関空がある。もしくは中空から抜けるのかもしれないし、そういったいろいろなことが考えられるという気がします。

もう1つ、私は前から思っていたのですが、近年、若い人がどんどん外国へ出ますね。年間渡航者数1,600万人ぐらいと聞いたのですが、それだけの人たちが外国へ出ていく。旅行の人、研修の人、ビジネスの人といろいろあるのですが、例えばJICAの青年海外協力隊、あ

資料6 世界遺産登録に向けての動き

・「癒し」の四国、「甦り」の紀伊半島が日本を再生する？



参考資料：「太平洋新国土軸の創造に向けて」太平洋新国土軸構想推進協議会

れだけで年間4,000人ぐらいの方がいらっしゃるそうです。その方々は、行く前、一生懸命行く先の言葉、社会、経済といったものを勉強されます。でも、それでは実際に行ってもかという、それは行った先でどんどん覚えることもあるはずですよ。

でも、私は何が一番必要かという、行く前にまず日本の文化を学ぶということの方がもしかしたら大事じゃないのだろうかと考えます。実際、自分が外に行ってみたときに、友達ができた。話してみた。日本はどうなのと聞かれた。答えられないんです。これほど恥ずかしいことはないなと思いました。でも、京都に行ってお寺を見てもわかるものじゃないんです。だとすると、例えば、JICAの青年海外協力隊の人たちが四国から紀伊半島にかけて、この日本文化のいろいろなものが詰まっている地域で研修してもらって、それから行ってもらう。すると、もっと膨らむんじゃないかと思います。日本人の若い人たちにとっても非常に意味のある地域になるんじゃないかというようなことを考えております。

最後になりますけれども、先生、この地域、ぜひともバラ色の未来に向かってということで、エールをひとつお願いしたいと思います。

〔三宅氏〕

学生を見ておりますと、関西のデートコースとして、お正月は初詣で、すごくたくさんの方が伊勢に行っているんですね。最近は、お遍路でも若いデートコースになりつつあります。こういう話になると、過去からのコースだったという感じに一方ではなりますが、実際には新しくできてきているというか、現在進行形で続いているんですが、昔の参り方とは全く変わってしまっているので気づかないものというのがあると思うんです。

だから、何かそういう、今の動きにうまくつなげていくためには、ここに来られている皆さんがこの地域をどんどん活用して、よかったところを宣伝していただく。紀淡というのは口コミのおもしろさというコミュニケーション、大々的に宣伝していくということも一方でやっていかなければいけないと思いますが、自分自身で見つけていく楽しさというのがある地域なので、1人1人が参加してできるものかなと思います。

〔武田氏〕

わかりました。ありがとうございます。先生のお言葉にもありましたとおり、口コミでぜひ広げていきたいと思いますというお話ですので、本日、紀淡海峡交流圏の皆様方、五條市にせっかく来ていただきました。東海南海交流地域をじっくりお楽しみになって、どうぞお帰りになってからも口コミで広げていっていただきたいと思います。またお時間がありましたら、ぜひともお越しになってください。

本日は、どうもありがとうございました。少々長くなりましたが、三宅先生もどうもありがとうございました。

〔三宅氏〕

ありがとうございました。